

第40回人権啓発 詩・読書感想文 入選作品集

すなおなきもち ことばにのせて



今回の入選者のみなさん



令和4(2022)年1月23日(日) ピースおおさか(大阪国際平和センター)



大阪府広報担当副知事 もずやん

令和4(2022)年2月発行

主催 大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会(愛ネット大阪)

目次

第40回人権啓発詩・読書感想文

募集・表彰事業について……………2

詩の部門

小学校（小学部）低学年の部

なんでも言える……………4
話せない……………6
けがさせちゃった……………8
心の声……………10
いじわるをされてたら……………12
きみがわらえば……………14

小学校（小学部）高学年の部

平和って……………16
ともだち……………18
見えないからこそ……………20
違っていても……………22
一人一人は自由……………24
両翼で今を翔べ……………26
治らない……………30

中学校（中学部）の部

見えている、知っている……………32
いじめていい理由……………34

聞こえない分だけ……………36
ことはナイフ……………38

読書感想文の部門

小学校（小学部）低学年の部

オトタケ先生の3つのじゅぎょう……………40

小学校（小学部）高学年の部

「私が今日も、泳ぐ理由
　　パラスイマーノ瀬メイ」を読んで……………42

中学校（中学部）の部

みんなが安心できる世の中へ……………44
「どうして肌の色が問題になるの？」を読んで……………46
マララの勇氣……………48
向ける視線と向けられる視線……………50
「普通じゃない」はおかしい……………52
「教室の悪魔」を読んで……………54
「黒い雨」を読んで……………56
「聲の形」から学んだこと……………58

講評……………60

中学校（中学部）の部

交野市立第四中学校	2年	ふくなが つむぐ 福永 紡
交野市立第四中学校	2年	わだ めい 和田 芽依
大阪府立生野聴覚支援学校中学部	3年	みなみ はると 南 温仁
泉南市立一丘中学校	3年	やました みわ 山下 実和

読書感想文部門

小学校（小学部）低学年の部

阪南市立上荘小学校	3年	かとう ほのか 加藤 穂乃華
-----------	----	-------------------

小学校（小学部）高学年の部

泉南市立樽井小学校	5年	あおいし まなか 青石 真佳
-----------	----	-------------------

中学校（中学部）の部

交野市立第四中学校	1年	かじ はなね 梶 花寧
交野市立第四中学校	1年	とんぶせん じゅり トンブソン 樹理
交野市立第四中学校	2年	おかだ あやね 岡田 彩音
交野市立第四中学校	2年	じょうべつとう まお 定別當 真央
交野市立第四中学校	2年	たかや ふの 高谷 楓乃
交野市立第四中学校	2年	みやざき はつね 宮崎 初音
堺市立津久野中学校	3年	かめおか まい 亀岡 真衣
大阪府立生野聴覚支援学校中学部	3年	なかい みう 中井 美佑

○表彰式

令和4年1月23日(日) ピースおおさか(大阪国際平和センター)

第40回人権啓発詩・読書感想文 募集・表彰事業について

一人でも多くの方に人権について身近に考えていただくため、人権の尊さやお互いの人権を守ること、差別のない明るい社会を築くことの大切さや平和の尊さを訴えることなどをテーマに、人権啓発詩・読書感想文を、府内在住・在学の小・中学(部)生から募集しました。

○主催

大阪府・大阪府教育委員会・人権啓発推進大阪協議会(愛ネット大阪)

○募集期間

令和3年7月1日(木)～9月3日(金)

○応募、審査

詩部門・読書感想文部門合わせて86校から1,200作品の応募があり、審査委員会において27作品を入選としました。

詩部門

小学校（小学部）低学年の部

箕面市立萱野小学校	2年	いしはら とうご 石原 燈吾
箕面市立萱野小学校	2年	いとう あかり 伊藤 朱莉
箕面市立萱野小学校	2年	いまむら あきと 今村 昊橙
茨木市立山手台小学校	2年	たなべ にこ 田邊 仁子
箕面市立萱野小学校	2年	まんたに はづき 萬谷 羽希
岸和田市立朝陽小学校	3年	こんどう えいた 近藤 瑛太

小学校（小学部）高学年の部

枚方市立殿山第一小学校	5年	やぎ ななみ 八木 七海
茨木市立茨木小学校	5年	やまもと りかこ 山本 梨花子
東大阪市立英田南小学校	6年	おおにし ゆいな 大西 優愛
茨木市立穂積小学校	6年	ながやま あいり 長山 藍里
寝屋川市立梅が丘小学校	6年	まちだ ひなた 町田 陽葵
寝屋川市立第五小学校	6年	みやもと のの 宮本 暖乃
東大阪市立英田南小学校	6年	やまじ かりん 山地 花凜

なんでも言える

箕面市立萱野小学校 二年 石原 燈吾

きょうはずかしいことがあった。

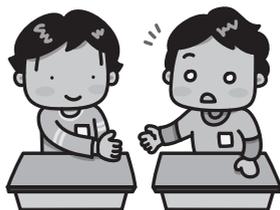
でも友だちにだけ言えた。

かぞくや先生には、言えないけれど

友だちにだけわらって言えた。

やくそくもべんきょうのことも言えた。

友だちとずっとなかよくしたい。



話せない

箕面市立萱野小学校 二年 伊藤 朱莉

わたしは、大きなこえで話すのがいがて

わたしのことを見てほしくない

うまく話せない

うまく言ばがでてこない

そんなとき、

友だちがいつしよにいつてくれると

あんしんする

いえてよかったな

一人で話せるようになりたいな



けがさせちゃった

箕面市立萱野小学校 二年 今村 昊橙

おねえちゃんとおそんでたら、

けがさせちゃった：

ぼくは、目を見ず、あやまった

そしたら、おねえちゃんは、おこった

そのとき、こうかいした

あやまるとき目を見ず、あやまったら

おねえちゃんおこらなかつたかもしれない。

いまでもモヤモヤはのこっているよ。

つきからは、あい手の目を見て

あやまるよ。



心の声

茨木市立山手台小学校 二年 田邊 仁子

当てられた時の正直な心

本当の心

あの

えっ

はい

パスして下さい

人前で話すのそんなにすきじゃない

こたえはわかっているけど

言うよりきくほうがすきな

こたえわかっていているけど

大きい声で言うのはむずかしい

小さい声なら言えるんだよ



いじわるをされてたら

箕面市立萱野小学校 二年 萬谷 羽希

もし、だれかがいじわる

をされてたら、

わたしが「ダメだよ。」

と言ってあげたい

友だちにささってる

はりを、わたしがぬいてあげる

そしたら友だちが

いい気もちになるから



きみがわらえば

岸和田市立朝陽小学校 三年 近藤 瑛太

きみがわらうと

ほくもわらう

ほくがわらうと

きみもわらう

ほくらがわらうと

みんながわらう

みんながわらうと

せかいがわらう

いまちよつと

わらってみませんか



平和って

枚方市立殿山第一小学校 五年 八木 七海

平和ってなんだろう

人によってちがうそれぞれの平和

戦争がないこと

幸せになること

人によって平和はちがう

ただみんなの考える平和には

みんなが笑顔になること

これとつながっているとと思う

その平和をこわすようないじめは

体も心もきずついでしまう

つらくて、いたくて、なにせこわい

いじめをしてなにがたのしいか

わからない

ふみだそう

やさしさの一步

すこしでもいい

そのやさしさは

平和につながる



ともだち

茨木市立茨木小学校 五年 山本 梨花子

いつもの教室、いつもの友達

でも一人なんかいつもと様子がちがう。

声かけてみても、

「大丈夫？」

「うん 大丈夫…。」

やっぱりなんかちがう。

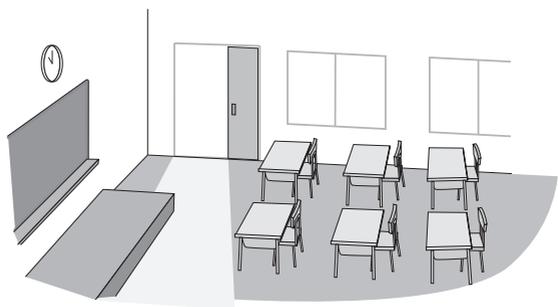
だから、手紙をかいてみた。

数日後、返事がきた。

読んだその次の日、

友達に笑顔がもどっていた。

なんとなくその子とキヨリがちぢまった気がした。



見えないからこそ

東大阪市立英田南小学校 六年 大西 優愛

ネットでは顔が見えなくなつて

その人の悪口を言える。

顔が見えなくなつて

その人がうれしくなるようなことも言える。

S N Sの使い方は人それぞれだけど

明日の悲しいだれかのニュースは

昨日のあなたの誹謗中傷が原因かもしれない。

人になにかを言う。っていうのはそういうこと。

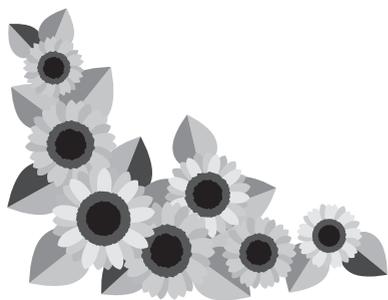
「見えないから」

ではなく、

「見えないからこそ。」

明日のすてきなだれかの笑顔は

昨日のあなたの優しい言葉。



違っても

茨木市立穂積小学校 六年 長山 藍里

あの子は言った

普通はこうだよ

この子も言った

できて当たり前だよ

みんなと同じことがいいことなの

みんなと違うといけないの

あの子に言った

わたしの普通はこれだよ

胸を張って

この子に言った

わたしにはできないの

でも頑張ってるよ

みんなと違うわたし

でもそれがわたし

違っても自信が持てる

そんな世の中に

なるといいな



一人一人は自由

寝屋川市立梅が丘小学校 六年 町田 陽葵

自由とは、自分が好きなようにすること。

友達とあわせる、あわせないかは自分で決める。

もし、自由がなかったら心に傷がついたり悲しい思いをする人もいる。

「あーしろ」「こーしろ」と決める人は自由、

それを受け入れる受け入れないかも自由だ。

自由をしすぎて相手を傷つけてしまうのはダメなこと。

自由は、自分が好きなようにすること、自分が好きなようにすることは簡単だ。

でも相手の気持ちを考えて行動することも大切。

自由ってむずかしい。



両翼で今を翔べ

寝屋川市立第五小学校 六年 宮本 暖乃

地球というのは一匹の鳥だ
両翼あるが片翼は動かない

「なぜ？」

それは「貌」だけだからだ
宣言・条約・憲法・法律など
色々な所で語られるのは「貌」だけだ
だが今「貌」だけで皆が笑っているか？
私にはそうは見えない
世間では貌だけで喜んでいる
「守る」と言い守らない
いまだに苦しんでいる人は
その「貌」と「現実」を見て
苦しんでいるのでは？

変えたいと思わないか？

「今」を

人生は一度きりだ

誰でも楽しみたいだろう

せつかくなら皆で楽しもうじゃないか

女性も男性も一緒に働こう

貧しくても助け合おう

皆で助けよう

好きな人は誰でも良い

女でも男でも

男になりたい？ いいじゃないか

女になりたい？ いいじゃないか

素敵な願いだ 叶えよう

黒人？ 白人？

皆で翔ぼう

性別も国も関係ないんだ
皆地球にいる命だろう

素敵な個性があるだろう
素敵な顔で笑うだろう
皆に見せよう
自分という姿

何があっても乗り越えようじゃないか
何かあったら話してみないか

そうするといつのまにか
両翼が動きだすんだ

霞んでいた目の前も晴れていくんだ
差別なんて言葉も無くなるんだ
皆で一步を歩み出すと

地球という鳥も

翼をはためかせるんだ

さあ 怖がることは何もないんだ

さあ ありのままの自分で生きていくんだ

さあ 両翼で今を翔んで行こうか

さあ君も一緒に翔ぼう



治らない

東大阪市立英田南小学校 六年 山地 花凜

ここに紙があるでしょう？

これに悪口を言ってみて

「バカ!!」グシヤ

「きもい」グシヤ

「しね」グシヤ

この紙に謝ってみて

紙をひらくと……

紙は元通りになった？

これと同じように悪口を言われて

傷ついた心は元通りにならないんだよ

ずっと消えないんだよ

それでもまだいじめる？

みんな同じ人間だよ

比べることなんて無いじゃない

見えている、知っている。

交野市立第四中学校 二年 福永 紡

私達は見えている、知っている。

あの子がいじめられていることを、

ただ、見えていないふり知っていないふり。

私達は見えている、知っている。

あの子へのいじめが増えていることを、

ただ、見えていないふり知っていないふり。

私達は見えている、知っている。

あの子はもう耐えられないことに、

ただ、見えていないふり知っていないふり。

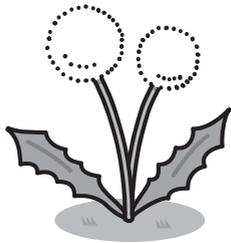
私達は見えていた、知っていた。

助けることも、止めることもできた。

後悔なんて、意味がない。

あの子はもう、

戻らない。



いじめていい理由

交野市立第四中学校 二年 和田 芽依

歩くのがおそいから。

声が変わだから。

うざいから。

顔が変わだから。

そんな理由で

どうしてあんなに傷つかないと

いけなかったのですか。

人を傷つけるのは楽しいですか。

悲しませるのは楽しいですか。

辛い思いをさせるのは楽しいですか。

どんな気持ちでやってるのですか。

私には分かりません。

分かりたくもありません。

「いじめた側にも理由がある。」

そんなことない。

いじめていい理由なんてありますか。

簡単に人を傷つけてもいい理由なんて
ありますか。



聞こえない分だけ

大阪府立生野聴覚支援学校中学部 三年 南 温仁

聞こえない

聞こえない世界は本当に大変だ
でもね

聞こえない分だけ夢があるのさ

何て言ってるか分からない

いつかその言葉が分かるようになりたい夢

見たいテレビや動画に字幕がない

付いたら今までの分見る夢

話すのが面倒臭くて離れて行く人たち

あの人たちと仲良くなりたい夢

聞こえない世界を知らない人が多い

みんなに知ってもらいたい夢

みんなと笑いたい夢

みんなと一つになりたい夢

他にもたくさんあるよ

聞こえない分だけ諦めたく無い夢がある

あんなことこんなことやってみたいのさ

ことばはナイフ

泉南市立一丘中学校 三年 山下 実和

「おまえうざい」

「きつしょ」

スマホをひらくと

こんなことばが並んでいた

「ことばはナイフ」って

どこかで聞いたことがある

ことばって、こんなに「痛い」ものなんだ

自分ではない誰かに

向けられたナイフだけど

私も痛かった

刺された人はもっと痛いはず

私は

人の傷を想像できる人でありたい

「そのことばはナイフだ」と

言える人でありたい



オトタケ先生の3つのじゅぎょう

阪南市立上荘小学校 三年 加藤 穂乃華

わたしは、「オトタケ先生の3つのじゅぎょう」という本を読みました。

なぜ、わたしがこの本を読んだかと言うと、テレビで「オトタケさん」を見て、「なぜこの人は、手と足がないのかな。」とふしぎに思ったからです。その時、お母さんに、「ふしぎに思うなら、本を読んでみたら？」とアドバイスをもらい、読んでみることにしました。

わたしはこの本を読んで、はじめは、手も足もないし、うがい者の人が、どんな風にじゅぎょうをするのか、ふしぎに思っていました。だけど、本を読むうちに、「オトタケ先生はすごい人だな、わたしもオトタケ先生のじゅぎょうをうけてみたい。」と思いました。

とくにわたしが一番いいなとおもったじゅぎょうの内よ
 できる。あい手がしろうがいのある人でなくても同じことだと思いました。その人のことを、どんなふうにかけて、どんな言葉をかけてあげるのか、どんなことをしてあげられるのか自分で考えて行動をすることが、とても大じだなどと思いました。

わたしはこの本を読んで、しろうがい者の人の見方が少しかわったように思います。はじめは、しろうがいがあるとあきらめないといけないのかなと思っていたけど、本を読んでしろうがいをもついても、先生になったり、ゆめをかなえたりすることができるんだなと思いました。その人をどんなふうに見るかは、自分しだいです。このことを気づかせてくれたオトタケ先生のじゅぎょうは、とてもすてきだなどと思いました。

「オトタケ先生の3つの授業」

作 乙武 洋匡

絵 下平 けいすけ

講談社



うは、「心のバリアフリー」です。

このじゅぎょうでは、オトタケ先生の子どものころのあそび方が書いていました。オトタケ先生は子どものころ、野球をするのが大好きでした。だけど手と足がないので「オトちゃんルール」という方ほうで、あそんでいました。たとえば、ふつうは一点しかはいらぬのに、オトタケ先生が点数をいれると、三点もはいるルールです。このルールを考えたのが、まわりの大人でも先生でもなく、オトタケ先生の友だちが、自分たちで考えたルールなのです。

わたしがもし、クラスにオトタケ先生のようなしろうがい者の人がいたら、「オトちゃんルール」のようにいつしよにあそべる方ほうを、作ることができるかなと思いました。

このじゅぎょうの「心のバリアフリー」を読んで、自分の目の前にいる人のことを「かわいそうな人」にしてしまうこともできるし、「しあわせな人」にしてあげること

「私が今日も、泳ぐ理由」 パラスイマー一ノ瀬メイ」を読んで

泉南市立樽井小学校 五年 青石 真佳

私は今、オリンピックでメダルをとることを目標に、毎日毎日スイミングで泳いでいるので、この本の題名と表紙の写真にとっても興味を持ちました。

メイさんは、生まれたときから右うでのひじから先がありません。最初、私は「何をするのも不自由だから大変だろうな。」と思いました。それに、水泳となると私が今、泳いでいる時を思いうかべたら、左右の手を同時に動かしたり、交ごに同じ力で水をかくことがほとんどなので、それを右うでのひじから先がない状態でうまく泳ぐことができるとは思えませんでした。でも、メイさんは、赤ちゃんのころから水遊びが大好きで、小さいころからプールで泳いでいたので、左右のうでがちがつても、まっすぐ泳ぐコツを自然に身につけていたそうです。本当にす

して、ちょっとでもたくさんの人たちに「社会が障害をつくっている」という考え方を知ってもらうためだと思えます。

これから、東京パラリンピックが始まります。今まで、オリンピックは「生けん命応えんするけれど、パラリンピックはちゃんと見たことがありますでした。でもこれから始まる東京パラリンピックは、一人一人の選手を、障害者ではなくアスリートとしてしっかり応えんしたいと思えます。

「私が今日も、泳ぐ理由」

文 金治 直美
学研プラス



ごい運動神経だと思えます。

そして、私がとてもおどろいたのは、メイさんが高校生の時に出場した英語のスピーチコンテストで発表したスピーチの内容です。

メイさんは、障害は個人の心身の機能の問題ではなく、社会がつくりだしてしまっているものだという考えを言いました。大切なことは、よく知らないままに人をはんだんしないこと、そして、人はみんなそれぞれがいがある特別な存在なのだと、理解して受け入れることだ。社会が障害をつくりだすなら、その社会が障害者をつくすことだって、できるにちがいないと発表しました。

私が最初、メイさんのことを「不自由だ。」とか「大変だ。」と思ったことはまちがいだつたと気づきました。そして、そういう考え方が、メイさんに障害を持たせてしまっているんだということを知りました。

メイさんが泳ぐ理由、それは、水泳とおして、障害に対する社会の目を変えるためであり、自分の思いを発信

みんなが安心できる世の中へ

交野市立第四中学校 一年 梶 花寧

私は、ブレイディみかこさんの「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」という本を読みました。この本は、書店で目立つところにたくさん置かれていて、どのような話なのか気になったので選びました。

本の内容は、著者の息子さんがイギリスでの中学校生活で実際に経験した出来事を書いたものです。息子はカトリック系の裕福な家庭の子どもたちが通う小学校へ行っていて、中学校もそのまま進学する予定でした。しかし、小学校で仲の良い友達と同じ中学校へ行くということを知り、息子も友達と同じ中学校へ行くことにしました。その中学校は多くの低所得層の家庭の子どもたちが通っていて、「元底辺中学校」とまわりから呼ばれるほど評判の悪かった学校です。息子はその学校へ入学し、小学生時代には経験したことがないような出来事に直面しながら、その出来事について考え、向き合い、そして成長していく、という話です。本の中身は十六個の出来事について書かれていて、特に心に残った二つの話について

書きたいと思います。

二つ目は、低所得家庭の子どもの昼ごはんについての話です。中学校は学食制なので、生徒たちが好きな食べ物を選び購入する仕組みなのですが、お金がなく、それを買えない子がいます。そのような生徒のためにフリーミール制度という国からの補助金を受け取る制度があるのですが、その金額が少なく、全然足りないのです。学食で食べ物を買って食べるしかない生徒がいます。その結果その生徒は犯罪者としていじめられてしまいました。私はこの話を読み、ごはんを買うことができなくて、万引きしてしまうほど困っている人が、先進国と言われるイギリスにもたくさんいるのだということを知り、驚きました。家庭が低所得である理由がその人たちにはどうしようもない原因であることも多いだろうし、まして子どもには何の罪もありません。それなのに、万引きという犯罪を犯してしまわなければ生きていけない現実には、改善されてほしいと思います。そしていじめが行われることは絶対にいけないと思いました。

二つ目は「元底辺中学校」の教員の話です。二つ目の話で、ごはんが食べられなくて困っているとあったように、この学校にはお金に困っている生徒が多くいます。なので、教員が自分の意志で生徒を助けることがあるそうで

す。例えば、私服参加の学校行事に来ない子がいると、服を買ってあげたりします。学校に対する補助金で生徒や

その家庭を助けることもあるのです。私は、教員がそのようなことをしていることにとても驚きました。この本に「教育者をソーシャルワーカーにしてみました。」と書かれていて、本当にその通りだと思いました。この学校の教員がしていることは本来は教員がしなくてはならないことではありません。教員は、生徒が困っていたら助けられる頼れる存在ではありませんが、金銭的に助けるのは違うと思います。この学校の教員が自分の意志で生徒を助けているのは良いことだと感じますが、ずっと続けるには限界があるし、教員への負担も大きくなりすぎます。このような教員個人が生徒を助けるといった状況を改善するには、フリーミール制度を受け取れる補助金の額を多くしたり、親が安定した収入を得られる仕事に就くことができるといった社会をつくる必要があります。そのため、二つの学校だけでなく政府の力も必要だと考えました。

これらの他にも興味深い内容の話がたくさんありました。著者は日本人なのですが、イギリスで生活しており、英語を話すので日本語の方がぎこちないそうです。日本に帰省したとき、レンタルショップでぎこちない日本語から日本人ではないと見られ、不審者であるかのよ

うな対応をされたそうです。

この本の話は、貧困や格差社会問題、いじめや人種差別など多くの問題を私たちに投げかけているのだと思います。頭では分かっていますが、実際に自分がその現実を見たときに適切な行動をとれるか分かりません。普段から色々な世界のことを知り、考える習慣をつけていかなければいけないと感じました。

最後に「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」というタイトルは、息子のノートに書いてあった言葉だそうです。「イエローでホワイト」というのは、日本人の母とアイルランド人の父をもつ自分自身のことを表していると思います。そして、ブルーの表す感情は悲しみですが、息子は怒りだと思っていたそうです。先生に添削され、正しい意味を知りますが、このノートに書かれたメモが添削前か後のどちらに書いたものなのかを著者は聞けずにいるそうです。私は、きつと悲しみも怒りもあるのだと思います。このように人から傷つけられる人がいなくなる世の中になれば良いなと思いました。

「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」

著 ブレイディ みかこ

新潮社

「どうして肌の色が

問題になるの？」を読んで

交野市立第四中学校 一年 トンプソン 樹理

あなたは、人種差別を知っていますか。最近ニュースによく取り上げられているので、少しですが私も人種差別について知っています。しかし、なぜ問題になっているかなど詳しいことは知りません。そんな私が、「どうして肌の色が問題になるの？」という本を見つけて、題名に興味を持ち、人種差別と肌の色に関係があるのではないかと思いい、この本を読むことにしました。

この本は、題名通り、実際にどうして人種が問題になるのか、人種差別がどういうもので、そもそもなぜ人種差別が存在するのかという質問に答えています。読む人が、人種差別がどういう仕組みで起きているのか、そしてそれに立ち向かうために何が出来るかについて理解できるように書かれています。それだけでなく、有色人の人々も私たちが、人種差別と戦うこと、そして違いを認め合うことを願い、人種に関する体験を共有してくれるページもたくさんあります。

この本の中で、二つびっくりしたことがありました。それの試みは失敗しました。もしこの試みが、失敗しなければ今はもともと人種差別が行われている社会になっていたと思います。このような国の代表もいますが、英国で二千年平等法という人種を理由にした差別を禁止する法律ができました。これを知って人種差別を無くそうとするために、努力している人たちもいることが分かりました。完璧な人間などいませんが、国の代表としてもこのようなことは、してはいけなと思います。なぜなら、幼い子供、子供だけでなくその国の国民の人たちが人種差別をすることは良いことではないのに、悪いことではないと思ってしまうと思ったからです。

一番印象に残り、勉強になったのは次のような文章です。人種差別をないもののように扱う方がより簡単な選択肢のように思えるかもしれませんが、それで人種差別がなかったことになるわけではありません。もし、人種差別について話すことができなければ、人種差別を認識することもできません。人種差別を認識することもできなければ、人種差別に立ち向かうことができません。人種差別に立ち向かうことができれば、私たちの暮らしや、私たちが生きる社会は、絶対に良い方向に進むことはないでしょうという文章です。この文章で、良い社会を作っていくためには、私も人種差別に立ち向かうことができる人にならないといけないことに、気づくことが

は、ある国の大統領や女王など国の代表でも人種差別的な行動をするということです。二つ目の出来事は、ドナルド・トランプが大統領だった頃に似た行動です。バラク・オバマはアメリカ合衆国の大統領に当選した時、世界中で最も力を持った男性の一人になりました。それでもオバマは彼の肌の色と祖先がケニア出身であることに対する偏見のせいで、人種差別的な扱いを受けたり、殺害の脅迫を受けたりしました。その次の大統領となったトランプは、オバマがアメリカ人であることを信じようとせず、オバマに出生証明書を見せるように要求しました。トランプ元大統領以外にも失礼なことをした人達はいましたが、国の代表としても、人としてもとても最低な行動だったと思います。二つ目の出来事は、女王エリザベス二世の行動です。有色人の人々は、何千年も前から英国の島々に住んでいました。しかし、時々、国民全員が白人である存在したことのない英国を想像したがる人がいます。千五百五十八年から千六百三年の間英国をおさめていた女王エリザベス二世も、そんな国を夢見ていた人の一人でした。今から約五百年前、女王は「この国にはすでに黒人がいすぎる。」と言って、ロンドン市長にすべての黒人を国の外に追いやる法律を作らせようとしたが、こ

できませんでした。そのために、まずは、自主的に人種差別について理解しようとすることから、始めていきたいと思いいました。そして、友達や家族のいる私の身近な場で、差別に立ち向かおうと思います。この考えを、私に教えてくれたのは、この本で、人種差別を受けた人の体験談について語った人たちの一人、ニケシユ・シユクラさんです。よく有色人である彼が、人種差別と闘う時にどうしたら彼を助けることができるのかと聞かれることがあるそうです。そんな質問をする人達への答えはこうです。「僕が人種差別と闘うのを手伝う義務はない。あなた達には、身近な場で差別に立ち向かう義務がある。」といいます。すぐに行動するのは少し難しいかもしれませんが少しずつやっていきたいです。

この本は、とても読みやすく、私の人種差別の問題についての疑問も全部解くことができたので、読んでよかったですと思います。それから前よりも人種について深く知れました。

「どうして肌の色が問題になるの？」

著 ニケシユ・シユクラ

クラ・フーチャン

訳 大嶋 野々花

創元社

マララの勇氣

交野市立第四中学校 二年 岡田 彩音

女の子を学校に通わせるなんて無駄だと、大勢の人が信じている国、パキスタン。マララは、そのパキスタンに生まれ育ちました。兄弟げんかもするし、本を読むことや、勉強をすることが大好きな、ごく普通の女の子だというのが、最初の印象でした。

パキスタンでは、女の子だからという理由だけで職業が限定されたり、男の人の付き添いが必要なければ買い物など家から出ることさえ許されないので。また、マララの村の子の多くが学校に行っていないかったり、マララのお母さんも字を読めませんでした。

そんな中、マララのお父さんは学校を経営し、マララに「自由に向かつて進みなさい。」と、勉強することや、やりたいことなどを応援し、愛情いっぱい育ててくれていました。

パキスタンで地震が起こった時、人々が傷ついていた心に、タリバンと繋がりのあるファズルツラーという人が圧力をかけてきました。最近、テレビでタリバンがアフガニスタンの州都を制圧したというニュースをよく耳にします。タ

リバンのお母さんもそんな二人を応援しました。

しかしこの後最悪な事態が起こってしまいました。スクールバスに乗っていたマララがタリバンの男に銃で撃たれたのです。何とかイギリスの病院で二命をとりとめました。マララの顔の左側は動かさず、耳から出血が止まりませんでした。銃弾はマララの脳の近くをかすめ、マララの体の中に残っていました。一度は死のふちをさまよいましたが、世界中からの励ましでマララは少しずつ元氣になつていきました。正しいことを正しいと主張できない状況に私は疑問を抱きました。

私はこの本を読んで、女の子は教育を受けなくていいと主張している国があることや、勇気を出して権利があると訴えている人がいること、そして間違ったことをしていないのに罰を与えられることを知りました。私自身もマララのような勇気ある行動はできないかもしれないけれど、おかしいことをおかしいと言える世の中を作るた

リバンの勢力は拡大していく一方のようです。

そして、マララの身の回りでは、タリバンが爆弾で学校を破壊することがよくありました。タリバンは、女子が学校で教育を受けることはイスラム教に反していて、パキスタンの人達も、大人になったら女性に家事をするだけだから、学校に行かなくていいと思っていました。また、マララの身に危険が迫った時に、教科書を持って避難しようとする、置いて行きなさいと言われました。タリバンのせいで、自分が頑張ってきたことを取り上げられる、私はそんな辛い話はないと思いました。今まで私は、当たり前のように学校に行つて勉強してきましたが、勉強したくてもできない子がたくさんいるのだと知つて、悲しくなりました。どんな人であれ、女の子であれ、みんな平等に教育を受ける権利があると私は思います。そして、もし自分が逃げなければならぬ状況になった時に、多分教科書など持つていかないだらうと思います。それだけマララは、勉強が好きだったのだと思います。また、なぜ女性が将来、家事をするか決めつけるのでしょうか。別に男性が家事をしていいし、女性も自由に働く権利があると思います。私は、「女子は、教育を受けずに家にいれば

めに何か出来るのではないかと考えました。例えば、パキスタンやアフガニスタンで起こっている出来事を自分のことのように身近に感じて考えることや、知ってもらうこと。そして、私たちと同じように普通に教育が受けられたり、すべての人々が人間としての基本的な人権を尊重される世の中になるように、今の私の将来の夢である外交官になつてこのような問題に取り組んでいきたいです。

「マララ」

著

マララ・ユスフザイ

パトリシア・マコーミック

訳 道傳 愛子

岩崎書店

向ける視線と向けられる視線

交野市立第四中学校 二年 定別當 真央

「誰もが幸せに生きる」とはどのようなことなのか、改めて考えました。

私は小学生のころ、「二日月」という本に出逢いました。きっかけは課題図書の一つでしたが、私は「二日月」に出逢うことができ「誰もが幸せに生きる」ことについての考え方、想うことが増えました。

本に出逢うまでの私が想う「誰もが幸せに生きる」とは、「好きなことを好きだと思えること」でした。勿論今もこの想いは変わりません。しかし、この本に出逢ってから様々な方向から、大切なことや幸せだと想うことができました。

「二日月」は、障がいをもつ妹「芽生」の姉である「杏」が、妹と二緒に生きていくなかで様々な想いを抱き沢山の経験をする話です。私がこの本を読んで感じたことは、「自分の目と周りの目」です。自分の目で見える景色や感じるのと、周りの人が見える景色や感じることは違

た。「向ける視線と向けられる視線」を変えるために、まずは自分自身で「想いのある視線」を心がけ、皆が幸せに生きることができると皆で創ることができたらと思いました。

「二日月」

作 いたう みく
絵 丸山 ゆき
そうえん社

います。では、周りの人に向ける視線、向けられる視線はどうでしょうか。私は、「誰もが幸せに生きる」ことの一つに、「向ける視線と向けられる視線を変える」ということを考えています。世界では、障がいのある方やコンプレックスで悩んでいる方が沢山います。そしてそのことではじめを受けたり差別を受ける方もいます。悩んでいる方がいる中、私には何ができるのだろうかと考えました。そして辿り着いたのが、「向ける視線と向けられる視線を変える」でした。しかし、「人の視線」を簡単に変えることはできませんのでしようか。きつと簡単に変えることはできません。ですが私は、視線にも相手を想う気持ちが必要なのではないかと考えました。人は日常的にコミュニケーションをとります。コミュニケーションをとるときに、発言に注意をしたり、相手に配慮をする想う気持ちが必要で、それは視線にも大切なことなのではないでしょうか。

「誰もが幸せに生きる」ということについて、本を通して「想いのある視線」が大切だと考えることができました



「普通じゃない」はおかしい

交野市立第四中学校 二年 高谷 楓乃

この本は、主人公のめぐが生徒手帳に赤毛証明という印を押されたことから、「普通とは何か」について考えていく物語だ。

私は、この本を読んであることに気付かされた。

それは、人によって「普通」の定義が違うということだ。私は、よく「普通」という言葉を使うが、「普通」に入る境界線はどこに引かれているかがわからなかった。

しかし、この本を読むと、「普通」に入る境界線はとも曖昧で、人によって違うとわかった。

なぜこのことに気付いたかというところ、本の中の登場人物それぞれが自分自身の「普通」を持ち、それを誇っているからだ。

また、このことに気付いたからこそ、私の間違いにも気付くことができた。

それは、髪を赤く染めている、小学校中学年くらいの女の子を見たときのことだ。その女の子を見たとき、私は、「なんで髪を染めているのだろう」「髪を染めるなんて、普通じゃない」と思った。

しかし、それは間違いだとわかった。私が通う学校には、髪を染めてはいけないという校則がある。つまり、髪を染めたら、学校の中では「普通じゃない」ということだ。しかし、その女の子にとっては「普通」かもしれないのだ。勝手に私が「普通じゃない」と決めつけてしまうのは間違いだと思った。

このときの私は、私の「普通」を他人に押し付けて「普通」か「普通じゃない」かを判断していた。

私のように、思い込みで人を判断している人はたくさんいると思う。しかし、私がこの行為を間違っていると気付けたように、思い込みで人を判断している人も、きっかけさえあれば気付けると思う。私の場合は、この本だった。

こうやって、思い込みで人を判断することがなくなればいいと思う。

この社会では、髪の色のことだけでなくみんなから差別される人は少ないと思う。だからこそ、髪の色が黒色でない人は、周囲からは認められるものの、学校などの公共の場ではルールに縛られ、心の中で迷いが起こるのだろう。

髪の色の違い、肌の色の違い、言語の違い、宗教の違い、性同一性障害者。人それぞれにこのような違いがあつて、それを認められる社会。これを多様性社会と呼ぶ。いろんな髪の色があつていいじゃないか。一人一人が違うことが、当たり前じゃないか。私はこう考える。

結局、めぐは「普通とは何か」の答えを「自分らしいありのままの状態のこと」とした。「普通に生きる」ということは、「自分らしく生きる」ということだ。

私の「普通」は何だろう。これから、たくさんの人とふれあい、話しあつていくだろう。その中で、答えを見つけていけたらいいと思う。

でも、これだけはわかった。

「普通じゃない」は、おかしい。

「赤毛証明」

作 光丘 真理
くもん出版



「教室の悪魔」を読んで

交野市立第四中学校 二年 宮崎 初音

人権についての作文が宿題で出された時、真っ先に思い浮かんだのがいじめだった。いじめは良くない。誰もがそう思っているはずなのに、なくならないのはなぜなのだろう。

私が小学生の時は、男女でも仲が良く、ケンカも少なかった。多少クラスでの対立があったが、逆にそれがクラス内での団結力を高めていた。いじめはない、と今まで思ってきたけれど、実際どうだったのかはわからない。誰もが被害者になりうるし、知らぬ間に加害者になっていることもある。この本を読んで、そのことをひしひしと感じた。

正直に白状すると、私はこの本を読むまで、いじめられる側にも少しは原因があるのではと思っていた。しかしそれは本当に何もわかっていなかったのだと知り、とても恥ずかしい。筆者はこう述べている。

「(前略)いじめられる理由は、いじめが進行する中で次々に作られてゆく。いじめ被害者はいじめられることによって、いじめに値する存在にさせられてゆく。」

「恐ろしいのは、被害者がいじめられる理由は加害者た

ルスに感染して加害者となってゆくのだ。」

今市井では、コロナウイルスが猛威を奮っている。感染を抑えるため、人との接触を避けるよう喚起されている。私はいじめという疫病も同じように、感染してもダメージを受けると思うのだ。いくら正当化したとしても、日が経って自分の誤ちに気がついた時、並の後悔ではすまないはずだ。私にも覚えがある。ひどいことをしたと自覚できたものは特に、何年後になっても忘れることができない。

いじめにメリットなど、ない。それなのにいじめがなくならないのは、一つ始まると終わりにくいからだ。誰もが己の保身に回り、被害者の痛みを理解しようとしなからずだ。私はこの本を読んで、授業やマスコミの報道での「いじめ」と現実の「いじめ」のギャップを痛切に感じた。いじめによって自殺に追いこまれた子ども達を哀れむ人は大勢いるだろう。しかしその内いじめの実態を知る人は、何人いるのか。いじめを無くすには、全ての大人が本当のいじめを知る必要がある。全ての人々が、全ての子ども達をいじめから守るために、協力すること。その大切さを、改めて胸に刻まれた。

小学生の頃、本当にいじめがなかったのかは、わからない。自分に覚えがなくても加害者だったかもしれない。

ちによって作られたものにもかかわらず、作り出した加害者たちが、自分達が作ったフィクションだということを忘れてしまうことである。(中略)だから加害者達は本心から言う。(中略)何の罪悪感もなく、ただ事実を告げているという感覚で。」

原因を作っているなど思いもしなかったから、愕然とした。私が知っていたいじめは、随分前に使い古された手法だったと知り、考えを根本から崩された。筆者はこの本の中で、繰り返し「いじめられる側に原因などない」と断言している。だから誰でも被害者になる可能性があるのだと。何もしてないのに突然みんなからいじめられるようになったら、私は耐えられない。原因があるのなら直すことができるが、それもないのでは、どうすることもできない。いじめの被害者は本当に逃げ場がなかったのだと思うと、胸が潰れるようだった。

クラス全員が加害者となってしまいういじめを、筆者は疫病に例えている。

「いじめは心の疫病である。(中略)ダメージを受けないためには感染しなくてはならない。だから子ども達は、ダメージを受けないために、被害者にならないために、ウイ

が、わからないから考えなくても良いという訳では決してないということを、今回思い知らされた。

筆者は、いじめの解決には大人の干渉が不可欠であることを述べている。かと言って、私達が何もしない方がいいはずがない。

たった一歩、されど一歩である。この本を読んだことで私は、教室に巣食う悪魔を滅ぼすのに、最も有効な一手を打てたと思っている。

「教室の悪魔」

著 山脇 由貴子
ポプラ社

「黒い雨」を読んで

堺市立津久野中学校 三年 亀岡 真衣

私は最初「黒い雨」という題名を見て、戦争を体験して流れた涙がどす黒い感情から生まれたものだったからそういう表現をしたのかなと思いました。最近学校の英語の授業で原爆の勉強をしたところだったので興味をわいて、この本で読書感想文を書きたいと感じました。

まず、この本の著者は戦争経験者で、本の中では広島原爆についてそのときの状況をリアルに心情も交えて著しています。主人公の視点でほとんどが書かれていますが、被爆者への偏見をはらすため自分の娘の戦時中の日記を書き写すという形で娘から見た戦争についても書かれています。

私はこの本を読んで想像以上の気持ち悪さに衝撃を受けました。回りくどかったり間接的であったりする表現が少なく、見たまま感じたままを直接書き表しているのが様子がはつきり伝わってきました。小学生のときにお話をしに来てくださった戦争経験者のどの方よりも強く印象に残って、ハンマーで殴られている様でした。特に主人公が会う人々の惨状をあらわしているところの印象

が強かったです。「頬が大きく脹れすぎて巾着のようにだらんと垂らし、両手を幽霊のように前に出して歩いている女」や「両手の甲の皮も剥けて垂れている」といった、実際に見たことがない私たちでも想像できるような表現のし方で、「だらり」「だらん」というような擬態語がそのおぞましさを際立たせているように感じました。今ではありえないことがたくさん起こっていて何ともいえない怖さをこんなに分かりやすく表現できるんだとおどろきました。

この本を読むまで私は戦争と言われても非日常なものなので「何か怖いもの」ぐらいにしか想像できませんでした。私は戦争で亡くなられた人々の数の多さは聞いたことがあっても、そこにいた二人一人の思いやもつと具体的な痛みや苦しみについて何も知らなかったんだということに気づかされました。爆弾が落とされた所には大人も子どももいて、友達もいて、家族もいたはずですが。それが一瞬で消え去ってしまうのはあまりにも苦しすぎると思いますが。その苦しみが伝えられることなく無くなってしまうのもまた怖いことなのではないかと感じました。この本を読んでいると、あまりにもあっけなく人々が死んでいくの

で人間の弱さとおろかさやひしひしと伝わってきます。人の命を奪い人に命を奪わせた戦争が世界から一刻もはやく無くなってほしいと思いました。主人公は町に死人があふれたとき「恐怖を通りこして脈は安定している」と言っていました。私は本当にそんなことがあるのか不思議に思いました。もし私が主人公の視点だったら、そんなに冷静ではられないのではないかと思います。つい先ほどまでは当たり前にあつたものが壊れていくと感情も壊れていってしまうのでしょうか。それを見た軍のえらい人たちはどう感じたのでしょうか。なぜ戦争が世界からなくならないのかわかりません。

私たちが今後同じ間違いを起こさないようにするにはどうしたら良いのでしょうか。私は人々が戦争について理解することが何よりも大切だと思います。戦争をするのはいけないことだというのは世の中の大半の人が理解していると思いますが、実際に体験した人は今では本当に少なくなっています。私は「黒い雨」を読んで、ショックは受けましたが戦争の痛々しさを体験談から知ることができました。小学校で自分の経験したことを話してくださいる方も年々減っていくと思います。その中で、実際には戦争を経験していなくても後々に伝え継いでいかなければいけないということがよく分かりました。「黒い

雨」という題名は決して大袈裟ではなくて、原爆による影響で本当に黒い雨が降っていたことも分かりました。戦争を「こわいもの」「悪いもの」で終わらせず、もっと調べたい、知りたいと思える人が増えれば二度と戦争は起こらないと思います。

「黒い雨」

著 井伏 鱒二

新潮社

「聲の形」から学んだこと

大阪府立生野聴覚支援学校 中学部
三年 中井 美佑

「友だちってなんだろう。」と石田将也君が彼自身に問いかけました。私はそういったことを考えたことがありませんでした。

ある日、久しぶりに家の本棚から「聲の形」を手に取りました。小学生のときに買ってもらったこの漫画はとても印象的でした。なぜなら耳が聞こえない西宮さんがいじめに悩まされ、苦しみながらも笑顔を絶えずに生きていく姿に心惹かれたからです。また、私は十四年間、ろう学校で過ごしてきたので周りは手話を使える友だちや先生がいることが当たり前でした。でも、いつかはろう学校から出ていかなくはなりません。だから「聲の形」を読んでもっと聞こえる世界を知ろうと思ったのがきっかけだと思いつきながら二ページ、二ページと読んでいきました。

私が共感したところは、高校生になった西宮さんと石田さんが再会するところです。石田さんは小学生のときに西宮さんの声を聞かずにいじめたことを後悔して、西宮さんと向き合うために手話を覚えたのです。これに西

関し、私はもしかしたらいじめたくていじめているのではないかもしれないと思いました。もしかしたら相手は「聞こえない」ことが何かわからないために気になってからかっているのかもしれない。それがどんなどんエスカレートしていき、大きないじめへと発展してしまうのだと考えました。こういったことをなくすために、ろう者がいること、困ったときは筆談などで助けてほしいということや伝えるべきなのでしょう。私だったら自己紹介のときや全校集会のような、皆が集まるような場所で時間を少しもらって伝えます。このように自ら発信していくことで、少しでも耳のことをわかってくれる人が増えるかもしれません。

「聲の形」を読んだあと、友だちとは何かについてある結論に達しました。私はただ話を聞くふりをして相づちを打つ人が本当の友だちだとは思いません。私の思う友だちとは、本当に辛いときや悲しいとき、そして楽しいとき、嬉しいときにお互いの気持ちを分かち合える人です。そういう人が一人でもいると何もかもが楽しくなると思います。これは障がいの有無に関わらず全体的に言えることだとも思っています。だから障がいがあるから関わらないようにしようと思っほしくないです。私には

宮さんは驚いていました。私が西宮さんだったら、同じように驚いたと思います。聞こえる方がろう者とスムーズに話すために手話を知り、そして使ってくれることがとても嬉しいからです。手話はろう者にとって第二の言語だと私は思います。聞こえない世界の中で手話を使って会話することは私にとつて当たり前です。でも、聞こえる世界で石田さんのような聞こえる人と手話を使って話せたらどんなに嬉しいことでしょう。もし聴覚障がいに対する理解がさらに深まれば、いつか手話が聞こえる人と聞こえない人を結ぶ架け橋となるかもしれません。

また、小学生の頃に聞こえる同級生と西宮さんは会話するために筆談ノートを活用していました。私も地域交流で中学校に行つたときに聞きたいことがあれば、筆談をお願いしました。その中学校の方々はすぐに書いてくれましたが、西宮さんをお願いしても落書きや差別的な言葉ばかりがノートを埋めつくしています。私は疑問に思いました。聞こえない人も聞こえる人と同じ人間です。地球上にいる人々は平等でなければならぬのに、どうして障がい者は聞くことも知ることも許されないのでしょうか。同じ場所で、同じ時間を共に過ごしているだけなのに、どうして拒まれてしまうのでしょうか。これに

まだそういったことをされた経験はありません。でも、大人になるにつれて必ず体験することになると思います。私はどんなに苦しくても、障がいから目を背けることは絶対にしないと心に決めていきます。障がいから逃げてばかりでは前に進めないからです。確かに「逃げるが勝ち」ということわざのように、逃げた方がいい場合もあるかもしれません。でも障がいに関しては逃げていくだけでは何もできないと思います。しっかりと自分自身と向き合うことが大事だと私は考えます。

この「聲の形」から、私は聴覚障がいの壁に真っすぐ立ち向かうことの大切さを教えられました。障がいを持っていることを恐れず何にでも挑戦する西宮さんに少しでも追いつけるように日々、精進していきたいです。

「聲の形」

著 大今 良時
講談社

講評

審査委員長 古川 知子
(神戸親和女子大学)

今年度「第40回人権啓発詩・読書感想文」に、大阪府内から1,200点の応募がありました。内訳は、詩部門で702点、読書感想文部門で498点です。

多くの児童生徒の皆さんが応募してくださったことに感謝しますとともに、27人の方の入賞をお祝い申し上げます。詩と読書感想文の部門ごとに、小学校(小学部)低学年・高学年、中学校(中学部)に分けて、審査をさせていただきます。

今回、特に読書感想文の審査の中で、「ある歌詞」への感想文をどのように評価するかについて、審査員の間でたくさん意見を交換しました。この応募作品は、とてもメッセージ性のある内容なのですが、結果は、「読書感想文」として、入賞には至りませんでした。ただし、このことは児童生徒の皆さんが日常触れているものの中から、人との関係で感じたことを自身の言葉で素敵な内容にまとめてあげられていることを否定することではないことを、この場を借りてお伝えした

いです。また、詩の部門において、家族や友人に対する「愛情」や「信頼」についての表現を、他の作品と比べてどのように評価するかについても議論をしました。

審査委員会では、応募作品を通して、一人ひとりの子どもたちの様子を思い描きながら、本来はすべてを選びたいので、各審査委員はあれこれ苦悩しながら、またその時間を楽しく過ごさせてもらっています。児童生徒の皆さんが日常的に刺激を受けて、感性の深まりや拡がりにつながっているものが、従前と変わってきているのであれば、要項等を見直すきっかけになってもいいかなと、個人的に感じています。

本取組みについては、保護者の方々をはじめ、大阪府内の小学校・中学校・支援学校において、教職員の方々が子どもたちに働きかけてくださっていることが何よりありがたいです。新型コロナウイルス感染症がまだまだ終息しない中でも、この作品集が大阪府内の各学校等において、子どもたちがお互いに信頼関係を築いて、しっかりとつながっていく学校教育に活用していただくことを願っております。